

モンゴルのテレビニュース制作過程に関する研究 —公共放送MNBと民放TV9のニュースルーム観察調査から— A Study of the Mongolia's Television News Making Processes: An analysis on the public TV station MNB and the commercial TV station TV9

◎李 恩敬
LEE Eunkyung

立命館大学大学院社会学研究科 Ritsumeikan University, Graduate School of Sociology

要旨 本研究は、モンゴルの全国地上波テレビ局の中で、公共放送MNBと民放TV9の2局のニュース報道局におけるテレビニュースの制作過程を観察調査したものである。政府の宣伝役だった国営テレビは2005年から公共テレビに転換し、2000年以降、多くの商業テレビ局も誕生した。本研究では、モンゴルのテレビ局ではどのようなプロセスを経てニュース制作がなされているかについて、ニュース価値観が作用するニュース選択に焦点をあてて調査した。その結果、ニュース制作過程の基本的な流れはアメリカや日本などと類似している点が多くみられた。ニュース選択の段階におけるニュース分類の方式や、ニュースネタ探しの手法において独特の手法が存在していることが特徴としてみられた。また、ニュース選択の段階では、テレビ局のニュース制作を取り巻くニュースルーム・カルチャーやジャーナリズム活動における形態の違いが、公共放送MNBと民放TV9のニュース制作過程に影響を与えていることがみえてきた。

キーワード モンゴル、テレビニュース制作過程、ニュースルーム、ニュース選択

1. はじめに

モンゴルは70年間にわたって社会主義体制を経験し、1990年に民主化された。現在、民主主義・市場経済社会への移行期にある中、国営放送が2005年に公共放送に転換し、2000年代には多くの商業テレビ局が次々と登場した。モンゴルにおけるテレビ局の運営面をみると商業化など欧米型の影響がみられる。そのような状況において、李は2008年9月に5つの全国向け地上波テレビ局の経営首脳たちとのインタビュー調査を行い、モンゴルのテレビ局で「ニュース番組」がもっとも力を入れて制作・編成されていることを浮き彫りにした(李, 2011)。しかし、社会主義時代に政府の宣伝役だった国営放送が前身である公共放送と、民主化以降、言論の自由が与えられた環境で登場した民放では、それぞれどのようなプロセスを経てニュースを制作しているのか、そして、何をニュースとして認識し、ニュース選択はどのように行われているのかはまだ知られていない。

本研究は、ニュース価値観が作用するニュース選択に焦点をあて、テレビ局のニュース制作過程を明らかにすることを目的とする。ニュース選択に関する研究は、Whiteが1950年に発表したThe "gate keeper": A case study in the selection of newsのゲートキーパー研究から、ニュース内容に影響する諸要因に関するものまで、多様な研究が展開されてきた。本研究ではニュース制作過程の中でみられるモンゴル独自の特徴を導き出すことを目指した。

2. 研究方法

ニュース制作過程を明らかにするため、テレビ局のニュースルームで観察調査を行った。ニュース制作プロセスにおいて、公共放送と民放との間に違いがあることが予想されたため、公共放送MNBと民放局のTV9の2局に対しニュースルームでの観察調査を実施した。2011年2月14日から3月29日までの間、それぞれ平日13日間にわたり観察調査を行い(公共放送MNBは2月15日から28日まで、3月14日から16日まで、民放TV9は2月28日から3月15日まで、3月24日)、あわせて記者や編集者たちとの半構造化インタビューも実施した。観察調査とインタビューは、各テレビ局の報道局を中心にしながら

ら、記者たちの取材同行も含めて行った。それをもとにフィールドノートを記録・作成した。

分析方法として、現場のデータから理論を作り上げることを志向する「グラウンデッド・セオリー（データ対話型理論）」質的調査分析手法を用いて、フィールドノートのデータを分析した。今回は、木下康人の『ライブ講義 MGTA—実践的質的
 研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』（2007）をもとに修正版グラウンデッド・セオリー手法（以下MGTA）を採用した。グレイザーとストラウスの *The discovery of grounded theory* (1967) を基にした MGTA では、①コーディング方法を明確にし、実践しやすく提示する、②プロセスを明らかにする目的の質的調査内容を分析するに適合する、また、③そのプロセスを概念図で表すことができるなど、3つの利点がある。

MGTA の手法に沿って、概念、定義、ヴァリエーション（具体例）、理論的メモの4つの項目を一つのワークシートに作成した。一つの概念で一つのワークシートを作成し、概念の生成は公共放送 MNB のフィールドノートの分析を全部終えてから、民放TV9のフィールドノートの分析を実施した。41の概念が作られ、それをカテゴリー化した結果、ニュース制作プロセスをチャート化することができた。

3. モンゴルのテレビニュース制作プロセス

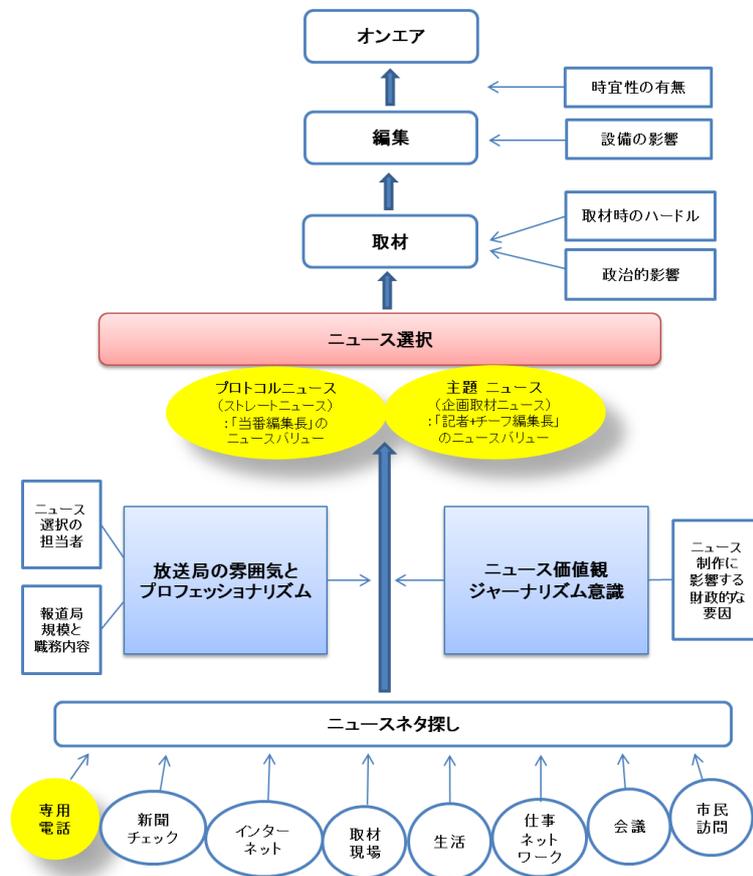


図1 モンゴルのテレビニュース制作プロセスの概念図

図1はニュース制作プロセスについて時系列に沿って表した概念図である。下から、「ニュースネタ探し」「ニュース選択」「取材」「編集」「オンエア」としてフローを作ることができたが、これはニュース制作の基本的な流れがアメリカや日本などと類似していることを表している。一方、ニュースネタ探しとニュース選択の段階でいくつかの特徴がみられる。

3-1. ニュースネタ探しの段階

公共放送MNBと民放TV9は、ニュースネタ探しの際に、報道局内の専用電話、日刊紙、インターネット、取材現場、記者自

身の生活環境、業界内の個人的ネットワーク、会議中の編集長のアドバイスを共通に参考に行っていることがわかった。

専用電話からの情報提供

中でも特徴的だったのは、2局とも報道局内に専用電話を設置したり、専用電話からの情報提供がニュースネタ探しの主要なものになっていたりした点である。専用電話からの情報提供は公共放送と民放で違いがあった。公放送共MNBは国会議員や政党の記者会見、政府・行政機関主催のイベントなどに関する情報提供が多い反面、民放TV9は国民からの電話による情報提供、ニュース番組の中に企業宣伝ともとれる「ビジネスニュース」コーナーが存在しており、ビジネスニュースの取材を要望する企業からの電話も多い。専用電話からのニュースネタは別途ノートに記録し、一日のニュースを決める担当者にとって重要な材料になるが、その重要性は、特に公共の場合に強く感じられた。また、公共放送は、9つの政府機関の関係者たちとの協力体制をもとにニュースネタを得ることもある。一方、市民が直接放送局を訪ね、情報提供をする場面は公共放送では見られなかったが、民放TV9では情報提供のために局を訪ねた市民がチーフ編集長と面談する場面を、観察調査期間中に数回みかけた。

朝の会議の役割

週2回開かれる報道局内の会議も記者たちにとってはニュースネタ探しに一定の役割を果たしていた。公共放送MNBも民放TV9も会議においてチーフ編集長が今週の 이슈に言及すると、記者たちはそれを参考にしてニュースネタを探す。公共放送MNBの場合、月曜日の会議では、記者たちが個人的に任された今週の主題ニュース（企画取材ニュース）のテーマをチーフ編集長に提出し、その場で記者個人のニュース企画力がチェックされることは特徴的だった。

3-2. ニュース選択の段階

ニュース選択の段階では、ニュース項目を決める際に影響する要因として、（1）ニュースの種類と放送局が追及するニュース、（2）放送局組織の雰囲気、（3）ニュース価値観とジャーナリズム意識の3つが浮かび上がった。

（1）ニュースの種類、放送局が追及するニュース

「プロトコルニュース」と「主題ニュース」

モンゴルでは、事実伝達中心のストレートニュースとしての「プロトコルニュース」と、記者たちの企画取材による「主題ニュース」の2種類に分類することができる¹。公共放送はプロトコルニュースが全体ニュースの6割、民放TV9は、主題ニュースが全体ニュースの7割を占めるようそれぞれ目標値を設定している。「プロトコルニュース」は、公共放送MNBでは、国会議員や政党の記者会見、政府・行政機関主催のイベントなどが対象として扱われる。一方、民放TV9では、国会議員や政党の記者会見に加え、自局主催のイベント、企業発展のためのセミナーなどがプロトコルニュースとして扱われる。プロトコルニュースの選択は、チーフ編集長ではなく、毎日（公共放送MNB）、あるいは毎週（民放TV9）の当番編集長が担当し、彼らのニュースバリューが作用していた。一方、「主題ニュース」は記者の企画取材ニュースとして、記者個人のニュースバリューと、相談・チェック役になるチーフ編集長のニュースバリューの両方が作用していた。主題ニュースのテーマは、公共放送MNBの場合、主に都市問題、環境問題、医療問題など社会問題が多い。一方、民放TV9は、社会問題の中でも、アパート住民への訪問取材、ゲル村周辺の汚染問題、家畜の値上げの影響で苦勞するモンゴル人家畜工場運営者など、市民生活に密着した具体的なテーマが多かった。また、民放TV9は、同じ記者会見を取材しても「プロトコルニュース」としてだけでなく、企画ニュースを前面に出すことで、出来る限り他の放送局と差別化する努力をしていた。しかし、民放TV9の記者たちの中では、プロトコルニュースと主題ニュースの区別に対して認識があいまいな場合もうかがえ、他局と差別化するためプロトコルニュースを主題ニュース化している一方、主題ニュース化に対しては、記者たちの中で合意したマニュアルや法則はないとみられる。

放送局が追及するニュース

公共放送MNBが追及するニュースには、①公共性のあるニュース、②国民に必要なニュース、③最近の 이슈に関するニュースがある。一方、民放TV9が追及するニュースとして、①正確・迅速なニュース、②国民に必要な情報、③面白いニュース、④最近の 이슈に関するニュースがあげられた。

公共と民放TV9の両方とも、国民に必要な情報の提供を最大の目標とするが、実際は、公共放送では政府・国会議員関連事項ニュースを、民放TV9では他の放送局との差別化を意識した国民生活関連ニュースを中心に選択する傾向が顕著だった。

¹ 「プロトコルニュース」はストレートニュースを、「主題ニュース」は企画取材ニュースを意味する、モンゴルのテレビ局で使われている業界用語である。

(2) 放送局の雰囲気とプロフェッショナリズム

ニュース選択の段階で注目できるのは、公共放送局と民放局の雰囲気が対照的だったことである。公共放送 MNB の雰囲気は、いくつかのチェック段階があり、体系的といえる。それが比較的高いニュースの質を保つことにつながる点で、専門性が感じられる。一方、民放 TV9 は自由な雰囲気が感じられる反面、非専門的な傾向がみられた。

公共放送 MNB の体系的性と手堅い組織イメージ

公共放送 MNB で体系的性が感じられる点は、報道局にニュース選択・制作にあたり考慮すべき 3 つの編集方針が存在することである。その編集方針は、第一に、国民に知らせなければならない必須的なニュースであり、2011 年 6 月までの前半期には、飲酒、健康的な環境、失業問題の 3 点を決めていた。第二に、公共利益を重視するニュースである。商業テレビとは異なり、障害者問題や人権問題など、なるべく国民全体に関係する多様な社会問題を取り上げようと心掛けている。公共の利益に関するニュース制作については、1 人の記者が 1 週間に 2 つの主題ニュースを担当する体制で進められている。第三は、‘今、現在’の時宜性をもつニュースである。

局の雰囲気に影響する重要な要因の一つは、報道局内の実質的な最高意思決定者であるチーフ編集長の存在と、そのチーフ編集長に対する記者たちの態度である。公共放送 MNB のチーフ編集長は 1989 年から記者として MNB に入社し、2006 年からチーフ編集長になった。ロシアで学士を取得し、アメリカの大学院で 4 年間ジャーナリズムを勉強した。モンゴルでは実力のある著名な記者で、MNB の記者たちもチーフ編集長を尊敬している。チーフ編集長は、1 週間の中で大きな柱となる出来事を中心にニュースの方向性を決める。また、記者個人が企画する主題ニュースのテーマを 1 対 1 でチェックすることで、記者たちのニュース感覚のトレーニングも行っている。報道局の記者たち全員を監理する責任者で、20 時のメインニュース項目の最終決定権者でもある。3 人の当番編集長や記者の立場からみても権威が感じられる対象となっている。

局の雰囲気に影響するもう一つの要因は、中間責任者の存在である。MNB にはチーフ編集長を支える中間的リーダーとして 3 人の当番編集長が存在する。3 人の当番編集長によるトロイカ編集制度はロシアの影響を受けたもので、経歴 8、9 年のベテラン記者が当番編集長となる。当番編集長の主な役割は、午前、午後の 10 分ニュースのニュース選択とオンエア、20 時メインニュース項目の順番を含め、第一版のニュース選択を担当している。3 人は毎日交代しながら、その日のニュース項目決定と取材記者の派遣を決定する。また、記者たちのニュース原稿をチェックすることも大事な仕事で、ニュース原稿のチェックは、ニュースソースの確かさ、文法、表現などを中心に行われる。このように、公共放送 MNB は、チーフ編集長と 3 人の当番編集長が、二重のチェックシステムを設定していることから、ニュース報道において一定のレベル（質）を維持することができる。また、MNB にはニュースオペレーション・マネージャーが別に存在しており、記者たちの取材派遣をサポートし、派遣状況の把握など、記者たちのスケジュールをチェックすることで効率的な人材管理ができています。その他にも、ニュース番組のオンエア時に、最初のニュースは政治、国会議員関連のニュース、その次が政党のニュース、その次が医療関連ニュースなど、オンエアニュースの優先順位が固定化していることをみても MNB の体系的性がしっかりしていると感じられる。

体系的性と専門性の反面、MNB が公共放送に転換する以前は、長い間、国営放送としてニュース制作に制限があったことや政府の立場を代弁する役割だったため、公共放送転換後 6 年が経った現在も、閉鎖的で硬いイメージが残っている。チェック・監督の段階が多いことから、融通性のない点が指摘され、民放 TV9 の記者の中には、MNB への入社や MNB で勤務していたが、自由な雰囲気を求め、退職後に民放へ移籍した者もいた。

民放 TV9 の自由な雰囲気と非専門性

民放 TV9 は、公共放送 MNB とは違い、自由・自律的な雰囲気が感じられる一方、体系的性が欠けているとみられる。

簡単なニュースルーム規則はあるが、全体的に一貫した編集方針はみられない。TV9 の主題ニュースは、編集長と局長との話し合いをもとに記者へ大まかな取材指示を出し、MNB のように、チーフ編集長が 1 対 1 で記者の主題ニュースのテーマをチェックすることはない。民放 TV9 のニュース制作にかかわる中心的人物は、局長とチーフ編集長、そして当番編集長である。

局長は大学で文学を専攻し、その後、雑誌や新聞に寄稿活動をしていた。民主化以降のモンゴルの言論界に大きく貢献している人物である。モンゴル報道研究所・アカデミーの学長（1994 年～2000 年）、国営放送 MNB のテレビ部門の副局長（2000 年～2004 年）を経て、その後、2004 年から TV9 の局長になった。局長は、ニュース報道局の仕事についてチーフ編集長に大まかな指示とチェックをしている。19 時 20 分からのメインニュースの中で、局長が直接日刊紙から主要ニュースをピックアップして紹介する「Focus Press」コーナーの存在は特徴的で、公共放送に比べて、テレビ局のトップが自由に番組編成に関与している民放の状況が感じられる。

TV9 のチーフ編集長は、2003 年に TV9 の創立時期に入社した第 1 世代の記者で、実力のある女性ジャーナリストとして評

働かれ、2008年からチーフ編集長になった。今週の大きな出来事など、ニュース対象となる出来事を記者たちに提示し、ニュース選択の過程では当番編集長の相談役としての役割を果たしている。当番編集長を含め、記者としてはMNBほどの権威は感じられない。

TV9の当番編集長は、公共放送MNBとは違い、入社2年以上の記者たちが順番で1週間ずつ担当している。当番編集長の仕事は、その日のニュース選択やそれに沿った取材記者の張り付けである。マネージャーはおらず、記者派遣の状況把握なども当番編集長1人が背負っている。チーフ編集長や当番編集長が記者たちの原稿をチェックすることはあまりなく、ニュースの監督やチェックシステムがしっかりしていない。

記者たちの勤務システムをみれば自由・自律性があると一見みえるが、非専門的な傾向があるとも言える。TV9は記者1人が毎日2つの主題ニュースを担当している。毎週2つの主題ニュースを担当する公共放送MNBに比べると、主題ニュースの取材が圧倒的に多い。TV9では毎日の主題ニュースのリストが記者たちの間で共有されていない。何らかの事情で取材が出来なくなった場合、TV9では取材クルーが移動中に主題ニュースのテーマを変更することもあるが、結果として他の記者とニュースが重なる場合も発生することがある。

TV9では、記者たちがニュース取材以外にも、アナウンサーの仕事も並行して担当している。ニュースアナウンスの仕事はむろん、トーク番組などの司会を担当することもある。最近では、社会問題を主題にする討論番組やトーク番組以外にも、エンターテインメント性のある番組も担当する傾向がある。記者の勤務環境の厳しさの他に、局内のアナウンサーは、フルタイムではなく、パートで働きながら、他の仕事を兼ねている場合もある。ニュース制作のディレクターが編集エンジニアの仕事も兼ねるなど多様な仕事をこなすことが求められている。仕事の役割分担がしっかりしていないとも考えられる。このような勤務システムがプロフェッショナルな放送人のあり方を妨げている。実際に、民放TV9のニュースコントロールルームでは、操作ミスなどで、ニュース放送中にも頻繁に放送事故が起きていた。

公共放送MNBと民放TV9の記者たちの勤務システムの差は、報道局の規模の差の影響もあるとみられる。MNBはニュース制作にかかわる報道局の人数が53人で、その分、役割分担もしっかりできているが、TV9はMNBの半分以下の24人で日々の勤務にあたっている。また、記者1人あたりの仕事量も多く、役割分担もしっかりできない面がある。

(3) ニュース価値観、ジャーナリズム意識

ニュースに対する認識、ジャーナリズム原則

記者たちは、ニュースとは何かという質問に、「情報」「新しい知識」「面白いイシュー」「真実」「国民に必要な情報」というイメージを口にした。映像を伴うテレビニュース制作の難しさが記者としての仕事を難しくしていると指摘した記者もいた。ジャーナリズム倫理については、過剰報道、間違った内容、正確でないデータなどを報道の問題として認識していた。

一方、真実の映像にこだわり、記者個人の主観的意見を排除し、バランスの取れた情報（偏らない情報）を世の中に送り出すことがジャーナリズムの原則だと認識していた。モンゴルのテレビニュースは、ニュース解釈の最終的な判断を視聴者に任せることを前提にしている。その判断材料を、真実をもとに伝えることがメディア機関の大事な役割という認識がある。公共放送も民放TV9もニュース制作にあたって強調した部分は、多様なニュースソースを利用することである。たくさんのニュースソースの確保は、各局ニュースへの信頼性にもつながるため、多様なニュースソースの確保が何より重要だと指摘した。公共放送MNBの場合、主題ニュース制作の際、1つのニュースに3つから4つのニュースソースがあるよう、入社時に教育を受けている。民放TV9は、取材ニューステーマと関連する公共機関の関係者インタビューを必ず取るように努力していた。

ニュース制作に影響する財政的な要因

今回の調査では、ニュース番組の役割と資金調達との間に妥協がみられた。それは、公共放送MNBの「予約ニュース」（予約放送は全体放送時間の05%）と、民放TV9の「ビジネスニュース」の存在である。MNBの予約ニュースは、主にNGO機関やビジネス機関（企業）の依頼で制作されるニュースで、予約ニュースの要請がくると、まず報道局内で部長やチーフ編集長が検討して、国民に必要なニュースと判断した場合、取材に行く。宣伝の対価として電波料がテレビ局に支払われ、運営資金にあてている。また、予約ニュースは選挙期間に急増（政党からの選挙演説放送の要請）する傾向もあった。

民放TV9では「ビジネスニュース」コーナーがあり、飲食店やデパートのオープン、セール、企業紹介などが一つのニュースという扱いで放送される。ビジネスニュース（宣伝）も国民に必要な情報の一つとして、ニュースなのだという認識である。

予約ニュースとビジネスニュースは、モンゴルテレビ局独自のものといえるが、今回の調査では、公共放送MNBの内部に、予約ニュース（特に選挙時期）について否定的なイメージをもつ記者もいて、局内でもジャーナリズムのあるべき価値観をめぐって矛盾や混乱がみられた。

3-3. 取材、編集、オンエア段階

取材時のハードルと政治的影響

記者たちがニュースソース確保のため、公共機関、警察署などで関係者のインタビューを取ろうとする際、インタビューに応じてくれないケースが多い。そのため、公共機関の意見を裏付ける、信頼性のあるニュース制作が難しい状況がある。また、総理大臣（モンゴル人民党）の政治資金問題で、NGO 機関（民主党関連）の関係者たちが開いた記者会見の際、放送局の取材が非常に少ないことがあった。どの政党関連のニュースネタかによって、放送局側の取材有無が左右される可能性がうかがえた。政党と放送局の間に特別な関係があることも予測される所以である。

編集作業の際、ディレクターはニュース内容にあまり関与せず、主に映像と原稿が一致するかどうかを考慮しながら作業を進める。ただ、記者たちが自分の意見や主張を展開する場合、内容について指摘し、記事を修正するよう指示することはある。

設備の影響、時宜性の有無

公共放送 MNB の場合、放送設備が古いため、編集機器にトラブルが起こることもある。オンエア予定のニュース項目編集に問題が発生し、そのニュースのオンエアが出来なくなるケースもある。また、主題ニュースの場合、時宜性のあるニュースかどうかにより、オンエア時期が遅延されるケースがある。

4. まとめ

今回の調査で、モンゴルのテレビニュース制作過程の全体的な流れは、一般的に知られている欧米スタイルの制作過程と特に差はみられなかった。しかし、報道局内に専用電話があり、その電話からの情報提供がニュースネタ探しの段階で重要な役割をしていることや、事実伝達中心のストレートニュースとしての「プロトコルニュース」と、記者の個人企画取材ニュースである「主題ニュース」というニュース分類がモンゴルの独自性であることもわかった。

特に、ニュース選択段階では、追及するニュースや局の雰囲気などで、公共放送MNBと民放TV9との間での差が顕著にみられた。社会主義時代の国営放送の経験をもつMNBと、民主化以降に登場した民放のTV9が、それぞれ異なる政治体制の中で登場し、活動してきた背景と経験により、局の雰囲気や志向するニュースに違いが出たとも予測できる。

公共放送MNBは、公共放送としての役割を、政府・国会議員関連事項ニュースを国民に正確に伝えることと認識し、国会議員など政府官僚の記者会見、政府機関主催のイベントなどをストレートニュースにおける「プロトコルニュース」として、全体ニュースの6割となるよう目標値を設定し、制作している。反面、民放TV9は、国民の生活を政府や政治家たちに知らせることを役割として認識していることと、他局との差別化を図ることから、市民の実生活に密着した企画取材ニュースである「主題ニュース」を全体ニュースの7割を占めるよう目標値としている。局の雰囲気においては、公共放送MNBは、体系的で専門性が見える一方、民放TV9は、決まった報道方針や編集政策がないことや、しっかりしたチェックシステムが欠けていることから、専門性が十分に感じられない。一方、公共放送はチェック段階が多いことから、報道内容は安定しているものの、業界内の記者たちの間では、閉鎖的で、硬いイメージがある。反面、民放TV9は、取材や編集などの作業において記者たちが比較的自由・自律的に仕事できることで、記者にとっては仕事しやすい場として好まれる傾向があった。

公共放送MNBと民放TV9の両局とも、国民に必要な情報の提供を最大の目的としているが、実際は、公共放送では政府・国会議員関連のニュースが多いこと、民放TV9では他局との差別化を意識した国民生活関連のニュースが多いことが傾向として予想される。

参考文献

- 1) Glaser, B. G., Strauss, A. L. (1967) : *The discovery of grounded theory : Strategies for qualitative research*, Aldine De Gruyter (『データ対話型理論の発見』, 後藤隆, 大出春江, 水野節夫訳, 新曜社, 1996.)
- 2) 木下康人 (2007) : 『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 3) 李恩敬 (2011) : 民主化後に新展開を迎えたモンゴルのテレビシステム—5 つの全国向け地上波テレビ放送局を中心に, 『立命館産業社会論集』第47巻 第2号 (通巻150号), pp. 121-142.
- 4) Shoemaker, P. J. & Reese, S. D. (1991) : *Mediating the message : Theories of influences on mass media content*, White Plains, NY : Longman
- 5) White, D. M. (1950) : The "gate keeper" : A case study in the selection of news. *Journalism Quarterly*, 27, 383-390.